

島田氏の書評に答えて

石井研士・河東仁・藤井健志

最初に島田氏に対して、的確な書評を通して、我々に解脱会研究を再検討する契機を与えて頂いたことに謝意を表したい。そしてこの場を借りて、その再検討の過程でより明かとなった我々の研究意図・立場を述べることで、島田氏の指摘に対する返答としたい。なお、時間の関係で編者を含む他の執筆者は参加できなかったことをお断りしておく。

島田氏の主な批判点は、本書の各論文が有機的に結合されておらず、所々でその見解が食い違っていること、従って解脱会の全体像が読者にとってきわめてわかりにくいことの二点だと思われる。これに関して我々は、本書を共同調査に基づきながらも基本的には各自の視点を生かした論文集とすることを目指したため、一方で、共同研究としては不十分な点もあることをみとめなければならぬ。しかし、我々の間に「問題意識の共有や相互批判を含め徹底した討論」が欠如していたわけではない。我々はそれぞれ独自の視点から解脱会を研究するとともに、互いの討論を通してその全体像を総合的に把握するべく努めてきたのである。それはまさしく島田氏の書評にあるように、「解脱会を成立させている要因」とは何かという問題意識に基づくものであり、解脱会の全体像を捉える上で「解脱会らしさ」とは一体何かということを明らかにしようとするものであった。それにもかかわらず、島田氏の指摘するような問題点が本書にあるとすれば、そこには単純に解決できない問題が存在するということにもなる。それゆえ我々は、解脱会の全体像を捉えきれなかったことにむしろ積極的な意義を見出したと思うものである。

我々は、各自、教祖の生涯と思想、教団の現状と会員の意識、そして教義と儀礼等の分析を進め、上述の問題を討議する中で、次のような疑問にぶつからざるを得なかったのである。それは、「解脱会を成立させる決定的な要因などというものが果たして存在するのだろうか」という問題であった。すなわち、むしろ「解脱会の解脱会らしさ」とは明確な成立要因をもたず、その中核が定かでない点にあるのではないか。そして、種々様々な形態の信仰や活動を含んでいるために、多様な解釈を許すところがその特徴ではないか、我々はそう考えるようになったのである。もちろん解脱会が現に教団として存立しており、ある程度の定まった教祖像、儀礼、世界観等を保持している以上、こうしたものをまとめる何らかのものがあるはずである。しかし、それは一言で明確に言い表せるような性質のものでは決していない。この点で

我々は、本書によって、従来の新宗教研究に対して一つの問題が提起されたとも考えている。従来主に研究の対象とされてきた教団は、島田氏の指摘にもある通り、その性格が比較的はっきりとしていて「宇宙論的なユートピア志向」や「高度の倫理性」といった中核的な要素が把握されやすかった。そして、そうした特徴的な教団に研究が集中していたため、解脱会のように漠として捉えどころのない集団の在り方についてはさほど考慮がなされてこなかった。しかし我々は、これに対して解脱会のような教団こそ日本の新宗教の大半を占めているのではないかと考えているのである。この意味で、解脱会の全体像が掴みにくいことは、解脱会だけの問題ではなく日本の新宗教全般の問題として、非常に重要な示唆を我々に与えてくれたものと積極的に受けとめねばならないと思われる。

以上が我々の統一見解であり、書評を読むかぎり島田氏の立場とも大きく相違したものではないと思う。ただ我々が、各自の視点をこの統一見解に沿ってまとめる作業をしなかったために、島田氏が批判されたのであろう。しかしあえて言えば、この種の教団の研究においては性急なまとめはかえって誤った結論を導きやすいのではないだろうか。我々はこの点に注意を払いながら、島田氏の指摘も考慮に入れ、より総合的な解脱会像の把握を目指して今後も研究を続けていきたいと考える。

次にいくつか個々の論文に対する批判に関して各執筆者の考えを記しておきたい。

まず第一章藤井健志「教祖・岡野聖憲の思想形成」についてであるが、藤井は教祖のいわゆる「宗教」的な面のみを研究してもその全体像を捉えることは無理であり、世俗的な面の追及が不可欠であるという立場に立っている。言い換えれば、岡野を初めから教祖となるべき人と見て、そのライフヒストリーの中で「宗教」的な側面の展開ばかりを追ったのでは、彼が教祖となる過程の様々な要因を見落とす恐れがあると考えている。「人間岡野」の徹底的な研究によって初めて俗人岡野が教祖となった鍵を見出せるのであり、より一般的には教祖の誕生の問題への一つのアプローチが示されるはずである。このことは、新宗教の多くの信者は「普通の人間」としての教祖の一面をよく捉えており、むしろそれだからこそ教祖に共感を寄せる場合も少なくないという藤井の調査経験にも基づいている。こうした立場から書かれた論文であるために、立教前後の岡野の思想が連続しているという結論に達したのだが、もし霊能力の獲得などの面に視点

を置いていたら異なる結果が出たであろうことは否定できない。しかし岡野の全体像を捉えきるほど研究が蓄積していない現状を考えるならば、いくつかの岡野像の並列は許されるべきであろう。

第二章の石井研士「解脱会の発生と展開」であるが、本章は解脱会の生成と発展に触れながら、教団の現状の把握に努めたものである。その際に筆者は、調査研究にありがちな一時の印象やわずかな資料から教団の全体を推し量ろうとするものではなく、均一な資料により支部活動のレベルまでほりさげてとらえようと心がけたのである。それゆえに調査の結果明らかになった支部活動の多様性の究明にあたるのが第一の目的ではない。この点に関しては、特定の支部や教区単位でのケース・スタディが必要であり、今後の課題として残されている。なお、教勢の概況については、本文の95～96ページを参照していただきたい。

最後に河東仁に対する批判にも答えておきたい。まず、「精神医学や分析心理学の理論の紹介がこれほどまでに詳細である必要があったのか」との疑問が島田氏から出されている。科学の世界には、「より単純な説明ほど真である」といった由の根本命題があるそうである。その意味で、評者の指摘にある通り、小沼論文の信者へのインタビューから抽出した御五法修業に関する説明の方が、拙論より単純かつ説得的であるのは、問題であろう。しかしそれに対して、執筆者は次のように考える。この論文の最大の目的は、「付記」に記しておいたように、憑依現象の側面を持った修行である御五法修業を、外部の〈信仰〉である科学ないし論理的思考体系に〈翻訳〉（評者の言葉を借りれば、解脱会によって「読みかえ」られたものを外部のものにも理解可能な形に再度「読みかえ」ること）することで、その共感・了解を図ろうとすることにあった。そして、その〈翻訳〉の作業は、まず〈翻訳〉される側の論理構造および諸用語を探り（第四章「解脱会の宗教的宇宙観」）、次に〈翻訳〉する側すなわち〈科学信仰〉の世界の論理構造および諸用語を提示した上で（第五章二節「修行の分析方法」）、実施するという形をとった。しかし、その作業の大半が精神医学や分析心理学の憑依現象に関する諸理論の紹介とつなぎ合わせに終始してしまい、肝心の御五法修業の〈翻訳〉ないし分析が多少生半かな一般論になってしまったことは率直に認めざるを得ない。本来この種の分析を行う場合、個々の事例分析が必須のものであり、その意味で本論文が不十分なものであることは事実である。ただし、この点にあえて反論すれば、たしかに評者の指摘にあるように、「修行を通して信仰を深めていくイニシエーション

的な過程を個々の事例から追っていく試み」がなされれば執筆者の意図するところはより明確になったであろう。しかし一方で、果たしてそのようなことが道義的に許されるのかといった感想も抱かずにはおれないのである。すなわち、個々の事例を克明に追っていくには、本書の第八章「解脱会員の信仰生活史」で行った以上に当人の心の奥底にまで立ち入らざるを得ないであろう。だが、そのような権利が果たして研究者にあるのだろうか。この問題が何らかの形で解決されない限り、執筆者は個々の事例の分析にまで立ち入ることを躊躇せざるを得ない。

ところで、精神医学等の紹介が煩雑であるとの疑問に対して、もう一言つけ加えておきたい。すなわち、外部の〈信仰〉という問題である。本書第五章の注(87)で指摘しておいたように、執筆者は、我々の属する文化は比較的最近まで「憑依現象を異例とは見ても異常とは見なさない文化」すなわち憑依現象と親和性をもった文化であったと考える者である。それゆえ、外部の〈信仰〉といっても、科学信仰は個人のレベルでいえばそのごく一部ないし表層でしかなく、その基層には上記の憑依に関する観念が連綿として存在し、解脱会と通底しているといった事態も考えられよう。そしてそれだからこそ、小沼のように信者へのインタビューを基に憑依現象に関する霊的文脈からの説明をそのまま引き出した方が、かえって外部にも説得的かつ共感的である。一方、科学信仰の立場から説明しようとする、まず用語の説明から始めねばならず煩雑にならざるをえない、といった皮肉な事態も生まれてしまうのである。

次に、本書全体にわたる問題として、「伝統的宗教の再生という観点」に拙論（第三章～第五章）は触れていない、との疑問にも反論しておきたい。実は、執筆者は、第四章においてこの問題に間接的にではあるが、触れたつもりだったのである。すなわち、ここで意図したことはたしかに解脱会の諸教義を宇宙観なる視点を設定することで、その論理構造を探ろうとするものであった。だが、その結果析出された現界と神界との交流図式から、解脱会が民間で信仰されている伝統的な神仏観・行事等を包摂し、さらにそこに新たな意味を付加した上で再生していく論理というものも明らかにされた、と執筆者は考えているのである。ただし、この点に関して、この章の主目的はあくまでも宇宙観の抽出にあるとの観点から、論点が多岐にわたるのを避けるため、この点には直接触れずにおいた。しかし、共同研究という本書の性格上、たしかに一言触れておく必要があったと思われる。